



第九回

あなたにあいたくて

生まれてきた詩コンクール

— ことばはやさしく、こころはふかく —



平成三十年度

作品集

第9回

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」

コンクール

—ことばはやさしく、こころはふかく—

平成 30 年度

作 品 集



北九州市八幡東区生まれ。詩人、児童文学作家。
幼稚園勤務のかたわら、詩や童話を書き始める。その後、児童文学誌「小さい旗」に参加。その作品は、小学校の国語教科書にも採用され、また児童合唱曲にもなった。詩集「いのち」で第五回丸山豊記念現代詩賞を受賞。代表作に「馬でかければ」「ぎんのストロー」「ごめんねキューピー」など。北九州市民文化賞を受賞。

みずかみかずよ

(一九三五～一九八八年)

宗左近

(一九一九～二〇〇六年)

北九州市戸畑区生まれ。本名は古賀照一。詩人、評論家、仏文学者、翻訳家。

東京大学哲学科卒業。詩集『炎える母』で歴程賞を受賞。晩年には『響灘』など一行詩の作品を発表。また古今東西を超えた美術評論を行い、著書に『日本の美 その夢と祈り』などがある。また翻訳ではエミール・ゾラ、モーパッサン、ロマン・ロラン、アガサ・クリスティーの作品のほか、ロラン・バルト『表徴の帝国』なども手がけた。詩歌文学館賞

チカタ賞 北

九州市民文化

賞を受賞し、

日本現代詩人

会から「先達

詩人」の顕彰

を受けた。



この詩のコンクールは、北九州の生んだ詩人、宗左近さんとみずかみかずよさんの業績を記念して行われるものです。

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」は、宗左近さんの編んだ詩集のタイトルから、「ことばはやさしく、こころはふかく」は、みずかみかずよさんのことばからいただきました。

目次

ごあいさつ

1

△小学生の部▽

木	小平	慶	2
お日さまの色	高岩	恭子	3
しんぞう	岡松	雪鶴	4
家族	村上	桃花	5
ぼくはぼく	徳地屋	咲菜	6
おかあさんのかみなり	小田孝太郎		7
金魚のしろちゃん	岡村	咲那	8
台風の日	大澤	弘介	9
がんばっていること	木元	裕基	10
何のためだろう	坂本	晶	11
電卓と悩める私	大石	寛子	12
おへんじ	金子	朋奈	13

△中学生の部▽

私がいない世界でも	宇田	桃愛	14
夏祭り	橋本	莉乃	15
私、わたし、黒、青	谷口	愛美	16
夏の音	上村	瑞稀	17
「セミのサイレン」	坂本	裕	18
温もり	入江	俊哉	19
堅実	高野	舞子	20
いつもの景色	チヨドリ	愛紗	21
まだ見ぬあなたへ	今池	璃奈	22
僕の新しい世界	生山	瑞稀	23
「笑顔」	坂本	一翔	24
って	尾崎	未夢	25
大人になったら	大津	若葉	26
言葉の世界があなたを待っている	小畠	理希	27
ひと夏の愚痴	神崎真里奈		28
講評			30
小学生の部 受賞作品			32
最終候補作品			33
中学生の部 受賞作品			34
最終候補作品			35
選考委員			36

ごあいさつ

北九州市長 北橋 健治



「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールにおいて各賞を受賞された小・中学生の皆さん、そしてご家族の皆様、誠におめでとうございます。

北九州市では、本市出身の詩人 宗左近先生、みずかみかずよ先生を顕彰するとともに、子どもたちの豊かな想像力や表現力を伸ばし、未来の詩人や作家が誕生することを願い、平成二十二年度にこのコンクールを始めました。

開催にあたりご尽力いただいた平出隆先生をはじめ選考委員、関係の皆様にも厚く御礼申し上げます。

九回目を迎えた今回は、一、〇〇〇を超える作品の応募があり、そのうち、一九五作品は、鹿児島県や兵庫県など県外からの応募でした。このコンクールが広く知られてきたのではないかと思います。

また、本市は、二〇二〇年の「東アジア文化都市」の開催都市に選定されました。これは、日中韓三か国において、文化芸術による発展を目指し、相互に交流を図りながら、一年を通じて様々な文化芸術イベントを実施するものです。「創造都市・北九州」として、さらなる文化芸術の振興に取り組んでまいります。

小・中学生の皆さんには、このコンクールや文化芸術イベントなどを通じて、ぜひ本市ゆかりの文学者の作品や業績に触れていただき、わたしたち市民の誇りとして末永く心にとめていただきたいと思います。

結びに、皆様には今後益々文学に親しんでいただくとともに、さらなるご活躍を期待いたします。

木

北九州市立戸畑中央小学校 四年 小平 慶

ぼくは、木から落とされた

でも、ある日男の子に拾われて

その子の家に植えられた

毎日水をもらって

ぼくはぐんぐん大きくなった

そして光と毎日話していた

毎日とても楽しかった

けれどぼくが大きくなっていくたびに

あの男の子も大きくなって

ついにかまってくれなくなった

ぬれたぞうきんのようになってしまった

光がなぐさめてくれた

たまにふってくる水をのみ

光も助けてくれた

雨と光のおかげで大きくなった

それから何十年もたったある日

子どもが遊びにきてくれた

ぼくはとてもうれしかった

その子は毎日きてくれた

ある日その子が木登りをしていたら

ボキッと枝がおれた

そしてたくさん種が落ちた

ぼくも昔こんな風に生まれたな

最優秀賞

宗 左 近 賞

みずかみかずよ賞

お日さまの色

鎮西敬愛学園敬愛小学校 二年 高岩 恭子

お日さまは何色かな

オレンジ色かな

だってオレンジ色は夕方の色

夜になる前に空がオレンジ色になるから

お日さまは何色かな

赤色かな

だって赤色はもえている色

お日さまをみたら目がとけそうぐらい
あついから

お日さまは何色かな

黄色かな

だって黄色は元気の色

お日さまが空のひまわりみたいに
みえるから

お日さまは何色かな

白色かな

だって白色はきれいな色

ピカッと光ってまぶしいから

お日さまは何色かな

にじ色かな

だってにじ色は晴れの色

雨がふった後や水たまりに
にじ色ができるから

本当のお日さまの色って何色なんだろう

もしかしたら地きゅうにある

ぜんぶの色を

お日さまがどけてくれているのかもしれない

しんぞう

北九州市立西小倉小学校 一年 岡松 雪鶴

どく どく どく どく

うさぎのしんぞう

ぴく ぴく ぴく ぴく

うさぎのおはな

どっくん どっくん

どっくん どっくん

ぼくのしんぞう

すう すう すう すう

ぼくのおはな

うさぎのしんぞうは

はやいなあ。

優秀賞

北九州市教育長賞

家族

北九州市立戸畑中央小学校 三年 村上 桃花

お父さんとお母さんと、
くりひろいに行ったよ。

くりはとてもかたいとげ、

とげのお家に住んでいたよ。

中身を出したら

くりのお父さん

お母さん

子どもがいたよ。

楽しそうな家ぞくだったよ。

優秀賞

北九州市立文学館長賞

ぼくはぼく

北九州市立三郎丸小学校 五年 徳地屋 咲菜

コスモスの花が咲いたよ。

辺り一面もも色だ。

コスモスのみつはおいしいよ。

毎日毎日最こうだ。

秋になったらいろんな景色が見られるよ。

ビューンと飛んでオレンジにそまったはっぱもね。

人が歩くとカサカサなるよ。

でもね聞いているだけなのに。

ぼくのすがたはこわがられちゃう。

でもね変わりたいなんて思わない。

だってぼくはぼくだもん。

おかあさんのかみなり

北九州市立足立小学校 三年 小田 孝太郎

おじいちゃんから おかしは

こわいものといえは

地しん かみなり 火事 おやじ

と教えてもらった

ぼくが こわいものといえは

かみなりを落とすときのお母さん

ああ 今日とかみなりが落ちる

テストが返ってきたからだ

学校から わざとゆっくり帰った

大へんなことになっていた

お母さんが ぼくの前に立った

「おこられるから帰りたくなかった。」

正直に話した。

はげしいかみなりが落ちるぞ

と思ったとたん

ぎゅうと力いっばいだきしめて

こう言った

「おこってばかりでごめんね

生きた心地しなかったよ

勝手にいなくならないこと

でも帰ってきてくれてありがとう」

お母さんのやさしいかみなり

ぼくだけに落ちるかみなりも

わるくないな

金魚のしろちゃん

明治学園小学校 二年 岡村 咲那

今年の春生まれ。

赤い金魚の中、一ぴき白い。

丸い体にひらひらしっぱ。

かわいいしろちゃん。

元気なしろちゃん。

でも、

しろちゃん、いつのまにか

ひっくりかえってる。

しろちゃんをたすけてあげる。

しお水に入れて一週間。

だいぶ元気になりました。

がんばれしろちゃん。

さらに何日かしたら、

長くおよげるようになりました。

よかったしろちゃん

小さいけれどいのちもってる。

だから、大じにしないとね。

台風の日

北九州市立西小倉小学校 五年 大澤 弘介

雨がまどガラスにあたる

はく手がわき起こる

ザーザーザーザーザザ：

まるでコンサート会場にいるようだ

指揮者たちが曲をひき

客席からはく手が聞こえる

いつの間に雨のはく手がたまってゆく

ザザーポチャ、ポチャ：

もうはく手は聞こえない

ただ、波が通り過ぎた後の海のようにだ

ぼくは目をとじる

静かだ

がんばっていること

北九州市立戸畑中央小学校 一年 木元 裕基

ほいくしよとがっこうはちがう。

ちがうからたいへんだ。

がっこうへはあるいていく。

おくれないうようにじかんをみる。

なれてくると一ばんになれる。

べんきようもたいへんだ。

こくごさんすうは、

よくきくようにしている。

しゆくだいはてをあらうとすぐにする。

がっこうにはルールがある。

ろうかはみぎがわをあるく。

うんどうじょうへは、

ようじがないときにはいかない。

たいへんなことがたくさんだけど、

たくさんがんばって

たのしいがっこうせいかつにしたい。

佳作

何のためだろう

北九州市立戸畑中央小学校 四年 坂本 晶

ぼくは生まれてきてから

ぎもんがある

何のために生きるのか

何のために歌うのか

何のためにあそぶのか

でも一つだけ気づいたことがある

何かやれば

何か気づくこと

電卓と悩める私

北九州市立戸畑中央小学校 六年 大石 寛子

テーブルの上の電卓

百八円の電卓

ONのボタンを押すと「0」が表示される
「6・1・2」と押すと「612」と出る

「x」を押す

「5・7・9」と押す

「=」を押す

押した瞬間に「354348」と出る

電卓はすごい

一瞬で答えを出す

めちやくちや頭がいい

でも

電卓は計算しか できない

電卓の使える言葉は

数字と $+$ $-$ $\times$ $\div$ $=$ いくつかの記号だけ

人間は

一瞬で答えを出せないことが多い

朝 着ていく服にさえ悩んでしまう

でも

歩くことができる

食べることができる

会話することができる

読んだり書いたりすることができる

そして 自分の考えをもつことができる

想像力を働かせ

新しいものを生み出すことができる

喜怒哀楽の複雑な感情をもつことができる

人間の使える言葉は 無限にある

無限にある言葉で

人と人が つながっていく

ボタンとそれを押す人間とだけ

つながる電卓

たくさんの人や物と

つながる私

さあ 今日も

悩んだ挙句

三日前と同じ服を着て

花だんの水やり当番をしに
スキップして学校へ行こう

おへんじ

北九州市立中井小学校 三年 金子 朋奈

はじめての海水よく

いっぱい泳いでくたびれちゃったから

すなはまで ちよつと休けい

すなに あなをほってみたら

あれれ

そこのほうから 海の水があふれてきた

すくっても すくっても

どんどんあふれてくる

人間の目には見えない あながあるのかな

もしかしたら このあなのむこうには

べつの海があつて

その海と つながっているのかな

そしたら そっちの海のすなはまにも

わたしみたいな子がすわっていて

あなをほって のぞいているかもしれないな

どんな子かな

むこうのすなはまって どこ国かな

えっ…じゃあ その子 なに人かな

えい語のあいさつなら だいじようぶ

学校で習ったよ

にっこりわらって

ハロー！ ナイス トゥー ミーチュー！

って言うんだよ

でも アフリカ人だったらどうしよう…

アフリカ語は まだ習ってない

そっか

こんなときのために いろんな言葉を

学校でべんきようするのかな

あなのむこうに

ちよつと ちつちやな声で

ハロー！ ナイス トゥー ミーチュー！

って言ってみた

そしたら

あなのそこから

ぶくっ ぶくっ ぶくっ

って あぶくがみつつ うかんできたよ

なに語のおへんじだったのかなあ

私がない世界でも

九州国際大学付属中学校 一年 宇田 桃愛

生まれてくる前
母親のおなかの中で
胎児は何を考えていたのだろうか
母親の気持ちは伝わっていたのだろうか
外からの声に耳をかたむけて
いたのだろうか
それとも
ただただ眠っていたのだろうか
何も感じてはいなかったのだろうか
私は一つも覚えていない
私は一つも見えていない
私が生まれる前の世界を

宗 左 近 賞

最優秀賞

死んだ後
骨だけになった人は
何処へ行くのだろうか
心はまだあるのだろうか
生きている人々を眺めるのだろうか
それとも
もう何処にもいないのだろうか
二度と現れはしないのだろうか
私は死んだことがないから知らない
私は死んだ人と話したことがないから
分からない
死んだ人の行く世界を
そして
もし 私が死んだとしても
私はきつと分からない
私が死んだ後の世界を
生まれる前の世界も
死んだ後の世界も
私たちは誰も知らない
私たちは何も分からない
けれども
誰だって望んでいる
自分がない世界でも
自分が愛されていることを

最優秀賞

みずかみかずよ賞

夏祭り

北九州市立門司総合特別支援学校 中学部一年 橋本 莉乃

風がわたしのほほを

なでるようにとおりすぎていった

おいしそうなかおりをはこんで

人から人へと荷物を届けるように

ふと上を見上げると

おおきな花が空に赤く咲いた

私、わたし、黒、青

九州国際大学付属中学校 一年 谷口 愛美

「あーあ。間違った」

ひとは大きな過ちを犯したとき、
どう立ち直ればよいのでしょうか

「やだな」

うだりそうな灰色の雲をながめる
いつあの「黒い」雲はきえるのでしょうか

失敗を思い返すたびに、

後悔ばかりしている気がする

きつと、考えることが多過ぎたんだ

。現実逃避

そんな言葉が脳裏にうかんだ

結局、ずっと独りでいる

誰かが泣いているのを見たとき、

わたしはどうすればよいのでしょうか

手を差し出す？

素知らぬふり？

でも彼女は泣いているじゃないか
やるせない気持ちになって窓をみるもし、わたしが手をさしのべたとして、
彼女の救いになるのでしょうか

もし、「大丈夫？」と言ったとしても、

大丈夫じゃないからこの状況なのであって、
わたしが彼女だったら、

「そばにいて。」

きつとそう願う。

黒く染まった「窓」をみた

私は独り泣いている

わたしはそつと、よこにたつ

私は少し前を向く

わたしは黙ったまま、ただよこにいる

私はおもむろにたちあがる

ずつとしゃがんでいたからか、

足が少しジンジンする

わたしは少し横にずれる

彼女がたちやすいように

私たちは、

わたしたちは、

窓をみる

雨音も、暗く厚い雲もきえた、空

そこにあったのは、

目が醒めるような、

酷くあざやかな、

「青」

だった。

夏の音

福岡教育大学附属小倉中学校 三年 上村 瑞稀

ちりーん ちりーん

風鈴が鳴る
祖父母の家の縁側で
鳴らした風とともに
私のからだの中で響いた

ザッザァ ザッザァ

波が来る
砂を踏む音も絶え間なく
青くて透明な音が
私のからだの中に響いた

ミーンミン ミーンミン

せみが鳴く
夕焼けの赤を塗られたような
山が 私を呼んだような
私のからだの中に響いた

しとしと しとしと

長雨が降っている
静かに 屋根を伝う
あじさいに染まった音が
私のからだの中に響いた

しゃく しゃく

かき氷を食べる
笑い声とふけていく夜
屋台のかけ声とともに
私のからだの中に響いた

ドドーン ドドーン

人々のさめない興奮と
町の夜を夏の夜にする
祇園太鼓と行列の明りが
私のからだの中に響いた

ヒュルル ドン ヒュルル ドン

花火の打ち上げに
火薬の匂いをさせながら
花火のはじける間際
私のからだの中に響いた

夏の音は 夏を告げ

夏の音が消えた時
夏が終わり 秋が始まる

「セミのサイレン」

美萩野学園小倉日新館中学校 一年 坂本 裕

夏になると
その木は
サイレンになる

その木は
時間を知らせる
清々しい
朝がきた
日差しが強い
昼になった
手でおおうほどまぶしい
夕焼けがきた
夏が始まった
夏の終わりが近づいた

その木は
出来事を知らせる
ネムの木の下で
子どもが遊んでいる
ケヤキの木の向かいの店で
すいかやかき氷を売っている
サルスベリの木の近くのお墓で
両手を合わせる人がいる
森の近くの川で
人が泳いでる
岸でバーベキューをしている

その木は
気持ちを伝える
土の中の六年間は
淋しかった
初めて見た地上の光は
うれしかった
二週間ずっと
この気持ちを伝えたい

何も知らずに鳴いてるようで
何でも知ってて鳴いている
平成最後の夏を
セミが鳴いている

温もり

九州国際大学付属中学校 一年 入江 俊哉

温かい
人の手が
人の心が
自分が思うより
手も
心も
温かい
冷たいというのを
忘れてしまいそうだ
温かい
太陽の光が
地面が
自分が思うより
光も
地面も
温かい
冷たいというのを
忘れてしまいそうだ
温かい
自分が座っていた場所が
干した後のタオルが
自分が思うより
座っていた場所も
タオルも
温かい
冷たいというのを
忘れてしまいそうだ
だれもが
どれもが
みんな
みんな
みんな
温かいんだなあ

堅実

九州国際大学付属中学校 一年 高野 舞子

白は黒へ
黒は白へ
姿を変える

時にはあつと霧が晴れたように
時にはさざなみが広がるように

しかし いずれも自己責任の範中か

楽は苦へ
苦は楽へ
姿を変える

時にはあつと霧が晴れたように
時にはさざなみが広がるように

もしや いずれも不可効力の範中か

オセロの石 ピアノの鍵盤
そして

人間の心
どれも二面を持ち合わせ
案外変わりやすい

私は思う
人間は 生ずる様々な気持ちを
コントロールしながら
境遇へ立ち向かって
生きなければならぬと

辺りが明るく
霧が晴れたような気持ちになったり
どんよりした気持ちが
さざなみのように
広がっていったりしても
堅く心を持ち
もち合わせた二面性で 立ち直り
姿をかえよう

いつもの景色

九州国際大学付属中学校 一年 チヨウドリ 愛紗

いつもの駅
 いつものホームで降り
 いつもの階段を人の流れに身を任せ
 進んでいく
 いつもの友達
 いつもの凍としたお姉さん
 体格が良いお兄さん
 バッグをリュックにしてからっている高校生
 みんないつもの場所に行く
 「まもなく電車がまいります。」
 いつものアナウンス
 みんな少し前に出る
 降りる人乗る人
 同じ方向に乗る人
 反対方向に乗る人
 みんなどこに行くんだろう
 同じ電車に乗っているのに
 違う人生を歩んでいる
 会社学校
 みんな違う組織の一人
 しかし「人」という組織の中では同じ
 とても広く感じるが
 「地球」という一つの星の
 一部のことだと考えると
 意外とせまい
 誰かが生まれると嬉しい
 誰かがいなくなると悲しい
 そのくり返してこの地球は成り立っている
 駅や電車は
 そんな組織の人たちが集まってできる
 一つの空間
 いつものホームに人がいないと不安になる
 いつもの時間に電車が来ないと不安になる
 自分にとっては関係ないことだけど
 それがないと不安になる
 なぜだろう
 それはたぶん
 景色も
 「人」という組織の一部だから
 何かが足りない
 組織は成り立たない
 同じ時間を
 同じ空間を
 違うように
 違う人と
 過ごしている
 同じ組織なのに
 不思議なことだ
 様々な思いをのせて
 いつものように電車は走っている

まだ見ぬあなたへ

福岡教育大学附属小倉中学校 一年 今池 璃奈

まだ見ぬあなたへ

私は、いま学生です。

一生懸命 勉強しています。

一生懸命 勉強するのは、

あなたに将来 教えるためです。

まだ見ぬあなたへ

私はいま、バスケットをしています。

いつも汗流し バスケットをするのは、

あなたに将来 バスケットを教えられるようにするためです。

まだ見ぬあなたへ

私はいま、たくさんの友達がいいます。

たくさん友達をつくるのは、

将来 友達関係で悩んだ時にアドバイスできるようにするためです。

まだ見ぬあなたへ

私はずっと、家族を大切にしています。

家族を大切にするのは、

生きるためには 愛情が不可欠だからです。

まだ見ぬあなたへ

何か悩んだら たくさん頼って下さい。

愛情が足りなかったら、抱きしめてあげる。

将来あなたの母親である以上、

何歳になってもあなたの頼れる母親でありたい。

暗い・狭い・寒い
ときどき聞こえる水の
ときどき笑い声
ときどきを
のだらうか

僕人の世は、どんと暗くなる。
お腹がすいた。何日たつたかな。
最近の僕は、ダンボールの隙間から
トをみる。ダンボールの隙間から

タをみるのか
とき近づく
僕も少しの
誰は僕な
はバな
いんか
の待
を拾
つて
く
る

業開こは
はくのを
そとダカ
うキンな
思がボい
っ来ーの
てるルに
いのの
ただふ
ろた
うが
か

でその
なもう
か誰い
ったう
た開こ
けとの
よは前
う何で
と度足
はもが
あ止
った
った

僕にはなにか
足るに達した
し、ふいにダ
ミしたボール
をふたつから

外から見る僕のダンボールは
外の景色に異臭を放っている

車そキ傷
しレに
てイ目

飼家自車
犬 転車

何久野館
でし良
僕ぶ猫

だけれど拾ってくれないかな
毎日そう思っていた
ある時

僕は小さな公園にたどり着いた
奥には小さな女の子
僕はその子と目が合うと

女の子が来るのかと
お僕は何かさるのかと

すゝと温かい手が

僕の手はこんなにかかっていたんだ

たおつてく腹がさがるんす帰りのいっ食ててべいく物物たれを僕たにたえてくれた

僕は必死に食へ物を口にしたい。僕は死ぬ前に食うべし。

その瞬間、僕は笑った。

「僕の新しい世界」

「笑顔」

九州国際大学付属中学校 二年 坂本 一翔

あこがれている

だれとでも話をし

積極的に関わっていく

友達の明るい笑顔に

あこがれている

数学の先生になるため

勉強を頑張っている

先輩の強そうな笑顔に

あこがれている

公園で自転車を押し

男の子を励ましている

父親の優しい笑顔に

僕の笑う顔は

どんなふうに人に映るだろう

明るく、強く、優しくありたい

つて

福岡教育大学附属小倉中学校 二年 尾崎 未琴

いつかは終わらないものも
終わるって
弱音はいてても
なんとかなるって
そんなことは
うそだって
何も信じて
ないからって

終わるものも
終わらないって
はじめなけりや
つづかないって
つづかないって
終わらないって
はじめなくちゃ
終わらないって

そんなことは
わかってるって
時間がないのも
しってるって
だけどいやだって
にげてばっかで
さいごにおいこまれて
ばっかりで

さいごにいまさら
シャーペンにぎって
目の前のものに
立ち向かうって
今さらおそいって
気づいてるって
あせりあせって
字もきたなくって

時間がすぎるの
わかっていて
終わる光も
みえなくって

今かいたのは
今の現状

大人になったら

北九州市立熊西中学校 三年 大津 若葉

大人になったら

どんな人間と出会うだろう

どんな友達ができるだろう

涙が出るくらい笑いあった

悪いことをして一緒に怒られた

つらいとき、そばに寄り添ってくれた

いつもとなりになっていたあの子

忘れてしまうのだろうか

大人になったら

どんな人間と愛し合っているだろう

どんな家庭を築いているだろう

父と過ごした

母と過ごした

弟と過ごした

祖父と過ごした

祖母と過ごした

叔母と過ごした

曾祖母と過ごした

家族と過ごしたあたたかい日々

忘れてしまうのだろうか

大人になったら、何がしたい？

叶えたい夢があることを

守りたい人がいることを

15歳の私が考えていることを

もう一度思い出してみたい。

言葉の世界があなたを待っている

北九州市立熊西中学校 三年 小島 理希

言葉の世界はあなたが来るのを待っています

世界は言葉であふれる「言葉の世界」です

わたしのなまえは「字引き」といいます

わたしはどんなことでも知っています。

わたしはみなさんに生きる力を与えたい

わたしはみなさんに豊かな心を育んでほしい

わたしはみなさんと共に言葉を通して

ふれあいたい

わたしの願いはそれだけなのです

「わたしがみなさんのパートナーである」

そのことを心の引き出しにそっと

しまっておいてください

言葉の世界があなたを待っています

わたしもあなたが来る日を待っています。

ひと夏の愚痴

北九州市立熊西中学校 三年 神崎 真里奈

私はセミが嫌いだ
夏になるとジリジリミンミンうるさくて
暑さをより引き立たせるやっかいもの
そう思っていたけど
彼らの命がたった一週間だと知ると
なんだか切なくなってくる

私はセミが嫌いだ
グラウンドのフェンスや
家の網戸にまでくっついて
まるで自分の歌声をじまんしてるみたい
そう思っていたけど
数日間というこの短い瞬間^{とき}の中で
自分の存在を必死にアピールしている
その姿を見ると
なんだか応援したくなる

私はセミが嫌いだ
勉強中でも部活中でも昼寝をしていても
お構いなしにうるさくて
いつまでも駄々をこねている子供のよう
そう思っていたけど
よくその声を聞いてみると
熱いエールを送られているような気もして
なんだかやる気が湧いてくる

私はセミが嫌いだ
一匹が鳴きだすと
続けて二匹、三匹とびやあびやあ騒がしい
まるでいつも誰かと行動したがる
女子みたいじゃないか
そう思っていたけど
タイムリミットが近づいている仲間を
一生けん命励まし、支えるその姿に
なんだか胸に込みあげてくるものがある

いつからかぱたりと静かになり
風鈴の音が家中に響いている
そのときに初めて

夏がめぐるたび

身近にある自然の過酷さ
美しさを

毎年

ちがうセミ達から
教えられていたことに

私は気付かされたのだ

平 出 隆

小学生の部の宗左近賞は、小平慶さんの「木」です。木から落とされたものが語り手で、それを拾った男の子との楽しい生長の日々と寂しい別れ、そこから「何十年も」の厳しい歳月を経たあとの、別の男の子の出現。けっして単調ではないはずの大きな時間を、よく簡潔にまとめたものです。そしてなによりもいいのが、最後の展開です。男の子の木登りで「ボキッと枝がおれ」、種が落ちます。「ほくも昔こんな風に生まれたな」という、木のつぶやき。作者のつぶやきも混じった、この「な」は味わえます。

みずかみかずよ賞は高岩恭子さんの「お日さまの色」。くりかえし「お日さまは何色かな」と問いかけるたびに、ちがう五つの色が見えてきます。最後は虹の色ですから、全部で何色出てきたことになるのでしょうか。

作者はまるでプリズムのようになって「お日さま」の光を分けてみたあげくに、「本当のお日さまの色」について考えたようになってきたようです。丁寧に光をより分けて見つけたために、ごく自然に、一つの発見に至りました。

*

中学生の部の宗左近賞は宇田桃愛さんの「私がない世界でも」という詩です。だれもが疑問をもつ、生まれる前の世界と死んだあとの世界。作者はそういうごく当たり前の一般的な疑問を投げかけておいて、「私は一つも覚えていない」「一つも見えていない」「知らない」「分からない」と強く言い放ちます。

しかしこういう強い否定は、そのあとにやってくる肯定的な力を、じつは準備しているようです。最後の部分で、作者は生まれる前と死



© Takashi Mochizuki / ©望月 孝

平 出 隆

北九州市門司区生まれ。
詩人・作家・多摩美術大学芸術学科教授。装幀家、

造本家としても知られる。

一橋大学在学中より詩と詩論を発表しデビュー。1974年に仲間とともに版元・書紀書林を構え、翌年、詩誌「書紀」を発刊。70年代の詩的ラディカリズムの先端を担う活動を展開。詩集『胡桃の戦意のために』で芸術選奨文部大臣新人賞、散文作品集『左手日記例言』で読売文学賞、散文集『ベルリンの瞬間』で紀行文学大賞、評伝『伊良子清白』で芸術選奨文部大臣賞、藤村記念歷程賞など受賞多数。また木山捷平文学賞を受賞した小説『猫の客』が2014年、世界的ベストセラーとなった。

んだあとを「自分がいない世界」として、一つにまとめてしまいます。なるほど、生前と死後とは、この観点によれば同じことになりそうです。自然な、しかし深い視点から、生命の願いは「愛されていること」という、切なくも真実にみちた発見に至ります。「けれども／誰だっ望んでいる／自分がいない世界でも／自分が愛されていることを」。

橋本莉乃さんの「夏祭り」が、みずかみかずよ賞です。たった六行の詩なのに、この言葉のもつ品のよさは特別です。最初の二行の、いきなりの触覚的な新鮮さ、真ん中の二行の、嗅覚と味覚を伴った日常的な優しさ、転じて、最後の二行の、天上的な視覚の見事さ。それらを一つに凝縮して提示している感覚のことを、気品と呼んでみたいのです。

*

ひとつひとつことを組み立てていくと、大きな羽ばたきが生まれます。自分の手を離れて飛び立っていきます。

小学生の部

受賞作品

最優秀賞
宗 左 近 賞 木

小平 慶
戸畑中央小学校 四年

最優秀賞
みずかみかずよ賞 お日さまの色

高岩 恭子
鎮西敬愛学園 敬愛小学校 二年

優秀賞
北九州市長賞 しんぞう

岡松 雪鶴
西小倉小学校 一年

優秀賞
北九州市教育長賞 家族

村上 桃花
戸畑中央小学校 三年

優秀賞
北九州市文学館長賞 ぼくはぼく

徳地屋 咲菜
三郎丸小学校 五年

佳 作 おかあさんのかみなり

小田 孝太朗
足立小学校 三年

金魚のしろちゃん

岡村 咲那
明治学園小学校 二年

台風の日

大澤 弘介
西小倉小学校 五年

がんばっていること

木元 裕基
戸畑中央小学校 一年

何のためだろう

坂本 晶
戸畑中央小学校 四年

電卓と悩める私

大石 寛子
戸畑中央小学校 六年

おへんじ

金子 朋奈
中井小学校 三年

学校賞

北九州市立 戸畑中央小学校
北九州市立 三郎丸小学校

最終候補作

「今」をつなごう

河合玲奈 西小倉小学校 六年

アイラブ まま

村上茅奈 田ノ浦小学校 二年

せんせいへ

松尾心愛 三郎丸小学校 一年

夏休みのおわり

田代陽向 若松中央小学校 五年

わたしのおにいちゃん

谷川せり 戸畑中央小学校 二年

今を生きる

伊崎優衣 戸畑中央小学校 四年

バツタ

花木陸人 戸畑中央小学校 四年

大好きな弟

井上晴留花 香月小学校 四年

小学生の部 応募総数388点

最終候補作品

新しい僕 〜ステップアップ〜	堀 ^{さかい}	俊也 ^{しゅんや}	九州国際大学付属 中学校 一年
僕の郷里	原 ^{はら}	仁成 ^{ひとなり}	九州国際大学付属 中学校 一年
歴史の中の僕	仁木 ^{にき}	胡伯 ^{こはく}	九州国際大学付属 中学校 一年
忘れてきた夏の メロンクリームソーダ	田崎 ^{たさき}	百夏 ^{ももな}	九州国際大学付属 中学校 二年
机の上の ダンスパーティー	原 ^{はら}	彩乃 ^{あやの}	九州国際大学付属 中学校 二年
生きる	丸谷 ^{まるたに}	理乃 ^{りの}	九州国際大学付属 中学校 二年
夜のドライブ	工藤 ^{くどう}	かなえ	曽根中学校 二年
自習室	田邊 ^{たなべ}	侑也 ^{ゆうや}	福岡教育大学附属 小倉中学校 一年
鹿児島ばあちゃん	徳永 ^{とくなが}	朱香 ^{あやか}	福岡教育大学附属 小倉中学校 一年
こうえん	伊藤 ^{いとう}	愛華 ^{あいか}	福岡教育大学附属 小倉中学校 二年
初盆	安藤 ^{あんどう}	綜海 ^{そうま}	神戸市立星陵台 中学校 三年
私の夏	荊尾 ^{かたら}	歩 ^{あゆみ}	神戸市立星陵台 中学校 三年
おくる	川本 ^{かわもと}	濡 ^み	熊西中学校 二年
私の人生を生きる	石羽 ^{いしは}	夕姫 ^{ゆうき}	熊西中学校 三年
また会えたらいいな	濱田 ^{はま}	春花 ^{はるか}	指宿市立南指宿 中学校 三年

中学生の部 応募総数666点

選考委員

最終選考委員

平出 隆

二次選考委員

原田 暎子

鷹取美保子

北谷 真司

大川内英樹

一次選考委員

原田 暎子

鷹取美保子

第九回

「あなたにあいたくて
生まれてきた詩」

コンクール

—ことばはやこく、こころはふかく—

平成三十年度

作品集

二〇一九年二月二十八日発行

編集・発行

北九州市立文学館

〒八〇三〇八二三

北九州市小倉北区城内四番一号

TEL 〇九三―五七一一―五〇五

FAX 〇九三―五七一一―五二五

印刷・製本 (有)青雲印刷

※本書掲載の記事及び写真の
無断転載・複製を禁じます。